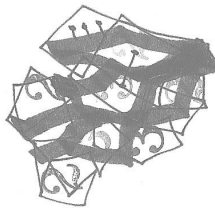


社会の実践力を学生に伝える 小さな地方大学の職員の役割



入試広報室
キャリアセンター
田中 雅俊
白澤 聖樹

松本大学

はじめに

松本大学の紹介は、本誌第四十六号の特集「地域と結ぶ 大学―地域とともに在ること―」で、住吉広行学長代行（執筆当時は副学長）が述べているので省略する。しかし、「象牙の塔」とは反対に、大学の垣根を取り払い地域に開かれ

た新しい大学づくりに挑戦する松本大学の姿勢はわかったが、果たして職員は、大学の方針にきちんと付いていっているのか。編集者が、私たち職員の意見を聞きたいと思われたのは当然で、素直な感想だったのだろうと推測している。そうした読者の関心にどの程度、お応えできるのか、いささか不安ではあるが、本学に限らず大学職員への期待が高まっていることは普段から強く認識しているので、私

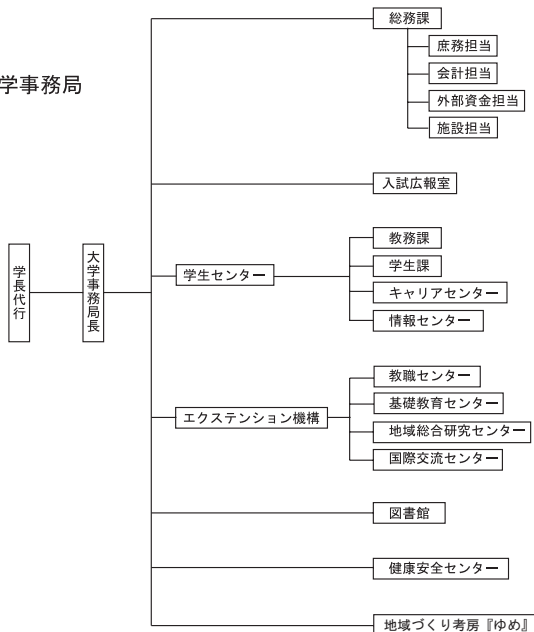
たちの「職員力」を検証しつつ、松本大学の現状を紹介したい。

事務局の体制

短期間で大所帯になった事務局

松本大学自体は二〇〇二年に設立されたが、その前身は松商学園短期大学（現松本大学松商短期大学部）である。当時は専任教員数二十一名、専任職員数十四名、嘱託・契約職員五名（二〇〇〇年当時）と小規模な組織で運営していた。それが、大学開学直後（二〇〇二年四月）には専任教員数三十四名、専任職員数十八名、嘱託・契約職員十名となり、学生数増加に伴い現在は、専任教員数八十四名、専任職員数三十名、嘱託・契約職員三十六名（二〇〇九年一月時点）へと様変わりした。嘱託・契約職員が多くなったのは雇用環境の変化にもよるが、短期間に多くの人が入職してきており、そのほとんどが民間企業からの転身である。公募して数多くの応募者から選ばれた職員もいれば、大学生協の専務理事だった職員、広告会社で営業企画職にあった職員、コンピュータ企業で専門職にあった職員と、それ

松本大学事務局



たなか まさとし ●一九六四年、長野県生まれ ●広告制作会社を経て二〇〇三年入職 ●主な論文・執筆に、『市民の視点から見た市町村合併』（月刊・自治フォーラム二〇〇二年一月号・第一法規出版発行）、『相互点検・評価報告書「広報活動におけるホームページ活用」』（松商短大・湘北短大 二〇〇六年三月）『ポタ輪学』によるまちづくり』（松本商工会議所主催まちづくり論文コンテスト入選・二〇〇八年六月） ●日々の仕事の中で常に工夫や改善を加える。そうした冒険をする姿勢がこれからの大学職員には必要だと思っている。硬直化しないよう、柔軟な対応を心掛けたい。

しらすわ せいじゅ ●一九七〇年、長野県生まれ ●二〇〇〇年九月入職、学生課を経て今年一月より現職。陸上競技部の顧問も兼務。 ●主な論文・執筆に、しのかめ書房発行『安曇野井戸端かいぎ通信』（二〇〇六年十一月創刊準備号、二〇〇七年五月創刊号、二〇〇七年十二月第二号）、信濃毎日新聞「建設標」寄稿。（二〇〇三年四月～二〇〇九年二月まで四十四回掲載） ●私のモットーは、常に泥臭く正面から学生と本音で向かい合うことです。学生の笑顔が、何よりも仕事への活力です。趣味は体を動かすこと（特にランニング。年に二、三回フルマラソン出場）とスポーツ観戦。

これ多彩なキャリアとバックボーンを所有している。

地域立大学「松本大学」の職員としてのタスク

地域づくり考房『ゆめ』

本学が地域と前線で最も接している場合は、何ととっても「地域づくり考房『ゆめ』」（以下『ゆめ』）が真先に挙げられる。

『ゆめ』の活動は、本年度の新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム（学生支援GP）にへ若者の地元定着につなげる地域活動の支援―地域まるごとキャンパス―「地域づくり考房『ゆめ』」の実践―に選定された。それは、『ゆめ』の活動から、地域の人たちが喜ぶ実践的な事業が多く誕生していることにもよるが、当初の目標通り、地域の人たちに認められた学生たちが自信をつけているといった成果が挙げられる。そんな生き生きとした学生たちを増やしたい。もつと実践力を育み社会に巣立って行ってほしい。そんな願いから、キャンパスを飛び出して、JR松本駅前のテナントビルの一室に分室を開設したばかりである。今まで『ゆめ』の活動は、専任教員と嘱託職員の各一

名で運営されてきたが、嘱託・派遣職員を二名増強し、さらに活動を本格化させることになった。その内容は多種多様であり、活動時間も簡単に区切られるものではない。時にはイベントの協力で休日出勤も多く、学生をリードする指導力の他に、学生の成長を忍耐強く見守る包容力が要求される。

アウトキャンパス・スタディとサポーター教育制度

本学のユニークな教育手法として、地域をキャンパスに見立て現地に向く「アウトキャンパス・スタディ」と、実社会で活躍している方を教壇に招く「サポーター教育制度」がある。いずれも地域の教育力を借りながら、現在の社会の課題を知り、考える力を身につける手段として導入されている。その詳細は先の論文にも紹介されているが、訪問場所との交渉やサポーター教員を手配する教員の負担は少なくない。依頼文書作成などの事務手続きや、引率補助は事務局でも対応してきているが、民間企業での人脈を生かして、訪問先の紹介やサポーター教員の要請にも職員が協力するようになった。こうした流れは、教員にとっても負担軽減になるだけでなく、新しい価値観やネットワークを生む。職員にとっても地域にアンテナを高くすること

で、大学が地域と連携するチャンスの芽を敏感に発見することができるだろう。

エクステンション機構

松本大学は開学当初から、公開講座や一般の方に向けた特別講義などを積極的に実施してきた。特に、平成十七年から松本市や松本商工会議所、松本観光協会、松本コンベンションビュウロと本学が共同で主催し、松本市の観光の質を高め、ホスピタリティあふれる人づくり、地域づくりを目指している社会人向け講座「松本市観光ホスピタリティカレッジ」の取組みは、平成十九年度の社会人学び直しニーズ受託事業にも選ばれるなど、評価の高い事業として認知されている。

本学の施設を一般に貸し出すことは、もはや日常的に行われている。外部の方が催す研修会や講演会、また、体育館や多目的グラウンドを使用するイベントにも開放している。こうした催しは土日・祝祭日・夜間に実施されることが多いため、今では貸出業務を業者へ委託するようになったが、担当者との打合せや備品の手配など管理業務は、引き続きエクステンション機構の職員が担当している。

地域総合研究センター

地域総合研究センターは、松本大学の研究活動を地域に発信することを主としている。昨年度は二十回の公開講座を実施し、多くの方を大学に招いたが、その他、年一回、「地域総合研究」誌を発行している。内容は、教員の論文をはじめ、教員が行った地域活動の一覧が掲載されている。これは、松本大学が地域に支えられているという姿勢から、いかに教員が地域へ還元しているかを理解し合うために導入された。また、他部署の職員の活動も教員サイドのみならず、縦割りになりがちな職員間でも見えにくいとの声があり、二年前から、各セクションのアニユアルレポート(年次報告書)を公開している。

地域総合研究センターは、松本大学の教員及び外部の研究者で構成されている。専任職員を置かず総務課が兼務しているが、公開講座などの大きなイベントは職員や場合によっては、学生の協力を得て運営されることがある。

松本大学出版会

二〇〇三年より松本大学出版会が設立され、教員の著書や公開講座での講演記録などを発行している。これは松本

大学の知的財産である教員の研究成果を、できるだけ教員の負担を軽減し、そして積極的に地域に発信したいと中野和朗前学長の強い思いから実現した。今まで十二冊が上梓されている。書籍が完成すると、長野県内をはじめ全国の書店の店頭に並ぶよう取次ぎ会社へ手配を行う。また、専用ウェブサイトでも紹介するが、こうした活動は職員が行っている。また年間の発刊数が少ないこともあり、図書館や入試広報室の職員が兼務している。

新村地区情報交換会

松本大学は、松本市新村という地区にあり、ここは地域をあげて公民館活動が盛んに行われている。このように地域とのつながりを大切に行っている本学では、二〇〇一年度より「新村地区情報交換会」と称して、毎月一度定例会議を行っている。この会議には、松本市役所新村出張所の他、福祉計画課や公民館、また地元の福祉施設の職員に加え、本学の教職員が参加して開催している。このような取り組みは、全国的にも珍しいのではないかと思われる。

開催の目的は、地域の現状や大学の現状を報告し合い把握することが一番にある。また、双方が抱えている課題や問題などについても話し合いが及ぶこともあり、積極的に

意見交換が行われている。そうすることによって、お互いを支え合い、より良い地域との絆を築き上げていくことにもつながっている。地域の皆さんの違った視点から大学を見てもらうことができることによって、いい助言が得られ大学運営に役立っている。

また、時には学生と一緒に参加をすることもある。例えば、大学祭など地域を巻き込んで行われる行事の際には、学生が直接概要を説明し来場を呼びかけたり、全戸配布のチラシの回覧依頼をするなど、学生自身にとっても地域の皆さんに支えられていることを知るいい機会として位置づけられている。

職員の仕事を通して実践力を学生に伝える

学生生活支援組織

松本大学梓乃森祭 組織図

大学祭実行委員会（全体の統括運営）

- 学生代表 ○教職員担当
- 地域住民 ○取引業者 等



松本大学には、学生生活を支援するための教職員組織として学生委員会がある。これは、学内における諸行事、学友会活動、クラブ・同好会活動など学生生活全般にわたって教職員が一丸となり、学生と密に連携を取りながら学生支援に努めている組織である。すなわち『学生を育てる』

ことに重点を置いている。ここでは、職員が学生とともに企画・運営に携わる場面が少なくない。いくつかの事例とともに紹介したい。

大学祭(梓乃森祭)の企画・運営

松本大学では大学祭(梓乃森祭)を毎年十月に行っている。これは、総合経営学部・人間健康学部・松商短期大学の三学部学友会(学生自治会)「学祭局」の学生が中心となり、六月頃より「実行委員会」を立ち上げ準備を始める。実行委員会は、学祭局執行部の学生、学生委員会教職員、事務局各課代表より組織され、総勢二十五名から三十名程度のメンバーで構成される。

本学では学部生も二年生の学生が主体となっている。これは短期大学の学生に足並みを揃えるためであるが、私たち職員が学生をサポートする傍ら、学部の三・四年生がアドバイザー役として関わり、後輩は先輩からの助言やアドバイスに真摯に耳を傾げる場面が多々ある。このように企画・運営において、職員が助言するよりも「先輩から後輩へ」というように、学生同士が教え合った方が良いという認識が強くなってきている。それは職員が学生の意思を尊重し、学生の持っている力を導き出し、自己実現に向け

てサポートするといった考えの学風から生まれている。

大学祭の位置づけ

松本大学における大学祭の位置づけは、学生・教職員・保護者・同窓生・地域住民の『五者共同事業』との認識を持っており(組織図参照)、時として地域の方が実行委員会に加わることもあり、ここにも地域連携を意識した場面が見受けられる。大学祭は学友会もさることながら、松本大学として年間を通してのメインイベントであり、さらに地域の一大イベントとして根付いていると言っても過言ではない。

例えば、模擬店を始めとする地域の特産品の販売、地域の婦人会によるフラダンスや、地元の太鼓連による演奏などのステージ発表が行われる。そこには、単に地域の方の参加にとどまらず、本学の学生も一緒になって参加することがある。以前、本学の大学祭に他学の方が視察に訪れた時、地域の方の参加率が高いことに驚かれていた。地域の方が違和感なく参加出来る点が、本学の大きな強みと魅力になっている。

地域住民に育てられている学生

大学祭と同様、他にも学内行事には地域の方が多く参加するのが本学の特徴であるが、逆に地域の方が主催するイベントにも、本学の施設を利用していただく。この時には、本学の学生が実行委員として加わり、企画・運営もさることながら、当日はイベントの出演や裏方として地域の行事をも支えている。

こうした地域の方との関わりや触れ合う機会を持つことで、学生の主体性や自主性が養われ人間力が磨かれる。地域のおばちゃんたちに「これお願いね」などの頼まれごとをされた際や、「あなたたち若いんだからもっとしつかりしなさいよ」などと、叱咤激励され認められることで、信頼関係や自分の存在価値を見いだし、勉強などあらゆる場面において相乗効果が発生するのである。地域の方が学生にとって「生きた教材」として貢献してくれる。机上では決して体験できない経験が、学生生活を支えている。

ウエルカム・フェアとウエルカム・パーティー

松本大学では、毎年三月に入学前の短期大学の新生を対象とした「ウエルカム・フェア」を、入学後の四月に全新生を対象とした「ウエルカム・パーティー」を実施している。二つとも似たような名称だが、目的が異なる。

ウエルカム・フェアは、履修選択の説明や学生生活のオリエンテーションを更に向上させ、短大生活を充実したものにしたいと企画しており保護者も参加する。ウエルカム・パーティーは、三学部の新生が一堂に会し会食やゲームを通して交流を図るとともに、上級生や教職員また地元新村地区の方々が歓迎し、新生の大学生活を有意義に過ごしてもらおうためのきっかけ作りを兼ねている。

本学の学生サポートの位置づけとして、中野前学長は「入試の時から学生サポートが始まっている」とよく語っているが、それが今ではキャンパス見学会の大学説明に遡っている。合格発表後では、前述の二つの行事に加え、一月から全新生を対象とした「入学前教育」と「キャリアアカウンセリング」を行っている。高校生活や今までの自分を振り返り、今後の目的を明確化することで、有意義な学生生活を送る礎になっている。

ここにも上級生の学生がスタッフとして企画・運営から携わる。学生たちは、四苦八苦しながらも新生生に対してプレゼンテーションを行い、「どうすればうまく相手に伝わるだろうか」など、表現や言い回しなどにも工夫する姿が見られる。新生もさることながら、在学生も今までの学生生活を見直し、自分自身を成長させるいい機会となっ

ている。

松本大学ナビゲーター(通称:マツナビ)

松本大学では、年に八回のキャンパス見学会を実施している。これは、広報委員会がメインとなり企画・運営をしているが、当日は、ほぼ全教職員が関わっており、全学をあげて取り組んでいる。そして、教職員と一緒にサポーターしてくれる学生が「松本大学ナビゲーター」略して「マツナビ」である。

マツナビは二〇〇二年に発足したが、本格的に組織化されたのは二〇〇五年頃になってからである。今では八十名近くの学生が登録しておりキャンパス見学会の他、大学見学を訪れる高校生やその保護者、また来客が訪れる際の学内案内もマツナビの役割りである。

ひとりで学内を案内するといっても並大抵のことではない。そこには、幅広い知識やそれを伝えるコミュニケーション能力が必要とされる。そのため、入試広報室の職員が中心となって定期的に研修会を実施している。挨拶やマナーなどの基本から、伝達力のスキルアップ、そして相手の気持ちを理解するEQ論まで幅広く学ぶ。こうしたことで、相手の立場に立つて物事を考える力やホスピタリティ精神

を養い、自己研鑽にもつながっていく。こんな甲斐あって、キャンパス見学会を訪れた高校生たちからは「あの先輩のようにになりたい」「入学したら絶対にマツナビに入りたい」などの感想が多く寄せられる。無談論、今マツナビで活躍している学生たち自身、高校生の時にはこう思っていたに違いない。こうしたことが、マツナビ学生の大きな励みと自信になっている。

これらマツナビの活動も含め、学生の大学運営への参画を企図した取り組みが「元気なキャンパスをつくり出す仕掛けの創出―治療から予防へのパラダイム転換―」として今年度の学生支援GPに申請し、選定されている。

学生スタッフ

松本大学では、学生が我々職員の仕事をサポートする「学生スタッフ」制度を設けている。この取り組みも学生支援GPの一環として行われている。

これは、経済的支援も考慮して「学内アルバイト」として契約を交わし(登録)、職員の仕事の一部を講義の空き時間に行ってもらうものである。

主な業務内容は、大学案内など冊子物の袋詰めなどの作業的なものもあれば、各種データの入力、パソコン業務

の補助、休日の図書館開館業務など多岐にわたる。これは、単に職員の仕事軽減だけが目的ではなく、学生自身の職業観を身につけるなどスキルアップのいい機会となり、職員と一緒に仕事することを通して社会性や協調性を養うことも目指している。

学生にとっては、授業の空き時間を利用して出来るため時間を有効活用でき、大学事務の仕事内容や実情が把握できる機会となる。学生もただ必要な業務をこなすのではなく「アルバイト」として契約をし、お金をもらって働くことを前提にしているため、職員もそれなりの責任を与え接している。

例えば、冊子を袋詰めするにしても、ただ封筒に入れてテープで留めるだけの事務的作業ではなく、そこには受け取る側の気持ちに立って、一つひとつを丁寧に作業していくというように、人とひとが接する場面でなくとも、相手を思いやり気遣う気持ちを芽生えさせることに重点を置いている。大げさかもしれないが「迅速に丁寧に真心込めて」といった意識が養われる。

なお、個人情報管理には細心の注意を払って取り組んでいることは言うまでもないが、付け加えておく。

年間の様々な活動を通して

ここまで、日常の職員の仕事と学生との関わりについて論じてきたが、まだまだ書き足りない面もある。年間を通して大学祭などの他にも、体育大会やリーダーズキャンプを始めとする各種行事、また学生が中心となって制作・発行している「松本大学新聞」など、学生主体に取り組んでいるものがたくさんある。更に、長野県内の大学・短期大学等の学生交流会「虹色フェスティバル」も二〇〇三年より本学学友会学生が主導し開催している。

私たち職員も日々学生と接する中で、学生からも多くのことを学び成長し続けているのだと感じている。日常の業務では、学生からも色んな苦情を寄せられ対応に苦慮することもある。しかし、それらを真摯に受け止めて、学生と共に一緒になって解決に向けて真剣に取り組んでいくことが我々に課せられた使命であり、これこそが『職員力』と言えるのかもしれない。

私たちは、学生に様々な気づきを与える機会を提供すると共に、そのサポート体制を整えるためのプロデュースを、今後大学職員が担う必要があると思っている。

大学職員としての質の向上と今後の課題

組織力を高める

セクシヨナリズムからの脱却と相互理解

松本大学は開学以来、常に新たな仕事と向き合ってきた。完成年度まではもちろん、学科・学部増など、教員も職員も今まで経験したことのない試みに挑戦してきた。その結果、事務局では、それぞれの部署で専門性や継続性を求められるようになり、配置転換を容易に実施し難い状況になってしまう。組織の活性化には人事異動が必要とわかっている、少ない人員の中で、ルーチンワークをこなすのがやっとなという部署もあり、人を育てる、人に引き継ぐといった業務を煩わしく感じてしまうほど多忙を極めてきた。やがて、他部署がいったい何をしているのか、お互いの仕事を理解できない状況になり、組織力を問われるようになっていく。こうした課題を脱却しようと始まったのが、アニュアルレポートの作成である。

平成十六年度から職員会議を実施するようになったのも「事務局全体で問題を共有したい」といった表れで、月一回、終業時刻を過ぎてから行われている。内容は、大学事

務局長から教授会の報告、各部署からの活動報告、協力依頼事項と進行する。最近では、持ち回りで、各職員が受講した研修や自己啓発のための体験を発表しており、スキルアップの場にもなっている。

しかし、もう少し突っ込んだ議論、例えば、職員の立場から本学の将来をどう考えていくのか。学生がもっと前向きに勉学に励んでくれる環境を創るには、どうしたら良いのか。そのために必要なサービスとは何かなど職員としてすべきこと。こうした問題は、時間の制限もありなかなか論じることができていない。

そうした職員の声を反映して、本年度から、学生と向き合う部署が集まり「学生センター」を立ち上げた。それまでカウンター越しに学生と対応するフロアには、主に受験生に対してアップローチする入試広報室もあったが別の場所に移動し、代わりに、別棟にあった人間健康学部の教務課が移り、学生の窓口を一本化した。

学生センターはこうして、新しい環境でスタートし、教務課・学生課・キャリアセンターとが互いの業務を見渡せるようになり横の連携が強化された。学生に対して、よりスピーディーで親切な対応ができるよう日々研鑽を続けている。

コミュニケーションンカアップを目指して カウンセラーの資格取得

学生に対しての職員の対応は、人によって温度差が生じることもある。毎年卒業生を対象に実施しているアンケートでも「あの職員の対応はどうかと思う」といったダイレクツな意見が寄せられる。果たして職員ばかりが悪かったのかは疑問も残るが、学生への対応は、人それぞれのコミュニケーション力に委ねられているのは事実である。

そうした経緯から、職員の個々のレベルアップを図り、学生対応の標準化を狙って、カウンセラーの資格を取ることに推奨されるようになった。もともと学生の就職支援をサポートするキャリアアセンターの職員はCDA(キャリア・ディベロップメント・アドバイザー)を取得し、学生に対して、前向きなストロークで接する対応を心掛けてきた。また、人間健康学部のカリキュラムに導入した「EQ論」と共にEQJ公認プロファイラーの資格を取る職員も現れ、現在では産業カウンセラーも加えて、このどちらかの資格を取得するよう求められている。

一人ひとりのスキルアップへ SD研修の導入

「これからの大学は、職員の質がいかに高いかが問われる」。小倉宗彦副学長兼大学事務局長は常に語る。今では当たり前になったが、毎朝、朝礼を実施し、交代で三分間スピーチを行うのも、そうした理由から始まった。

職員は、高校の教員や保護者、高校生とも話す機会が多く、受験生が望んでいる大学像を直接聞く機会が多い。また、他学の職員とも交流があるので、様々な大学の情報が入りやすい。この情報を教員と共有し、松本大学の運営面に反映することができるか否か。情報をいかに活用できるかも職員の能力と大きく関係する。松本大学のこれからの方向性が、こうした現場の小さな声から決まることも、あながち、あり得ないことではないのである。

今年度、学生支援GPに選定されたことを契機として、全職員を対象にSD研修が本格的に導入された。現在進行中であるため、成果はこれからといったところだが、現在までを振り返ってみたい。はじめに係長以上の役職の職員と若手職員に分かれ、外部コンサルタント主導の研修を二回実施した。係長にはリーダーシップをテーマに、若い職

員の声に耳を傾けるといった内容の研修が実施された。若手職員の研修は、業務改善に向けて現状の課題を抽出してもらった。それと並行して、それぞれの職員が抱えている大学の課題について個別に聞き取り調査を実施し、事務局組織の問題点を浮き彫りにした。その結果、松本大学に不足しているものが二点挙げられた。一点は大学そのもののビジョンである。本学は開学以来、建学の理念として「自主独立」を掲げてはいるが、具体的なもの、もっと事務局全体で分かち合える目標、言い換えれば「どんな大学を目指すか」が知りたいのである。二点目は横の連携のなさ、他部署に対しての理解不足が挙げられた。再びセクシヨナリズムからの脱却を突きつけられた格好になった。

大学職員が関わる大学づくりと大学改革

どんな大学を目指すのか。

ビジョン策定へ

第一章のSD研修が終了し、次に課題を解決し実現させるための第二章に入っている。今回の執筆はちょうどそんなタイミングと重なった。昨年の流行語でもある「アラフォー」ではないが、四十歳前後の近未来の松本大学を担

う職員に託され、プロジェクトチームが発足した。年度内を目標に、ビジョン策定と組織の連携について、職員の間からみた指針をまとめる。

職員の自分は、教員をサポートすることもひとつの職務だが、先にも述べた通り、本学では学生のサポートも重要な責務だ。むしろ、教員とは別の角度の視点を所有することで、大学としての厚みを付加できるのではないか。教員にしても、ただイエスマンだけの職員でいいとは思っていないので、事務局としての考え、即ちビジョンを持つことが教員にもビジョンを考えていただく機会にはしないか。むしろ教員サイドから別の意見が出ることで、さらに進化した新しいビジョンが策定できるのではないか。本来、ビジョンは創れば終わりという性質のものではなく、時代と共に変化していくものであり、ビジョンが変化していく方がむしろ自然ではないかと考えている。

現時点では、職員が創るビジョンについては未定であるが、明快単純で分かりやすく、行動レベルが実現可能なものが望まれる。言い古された言葉ではあるが、「自分らしさを見つけられる大学」「へ学生のためにを主語にしている大学」といった誰もがイメーシしやすい言葉。そうしたビジョンが望ましいと個人的には考えている。果たして、

本誌が発行される頃にはどのようなものが完成しているのか、プロジェクトチームの一人でもある我々も楽しみにしている。

もう一方の組織の連携については「お互いの仕事を知り、信頼関係を築く」ことができれば、本来そう難しいことではないはずだ。今回、かなりの時間を費やし話し合うので、そのヒントが見つかることを期待している。

開学そして学科増、学部増と歩んできた松本大学も二年は大きな変化はない。拡大路線に一区切り付け、密度の濃い教育体制を整えている。そして、組織としてのゆとりが生じ、いよいよ人事異動も活発に行われるようになってきた。

松下幸之助ではないが、失敗を恐れず挑戦していく学風、例え失敗したとしてもチャレンジした勇気を称えることができる学風―。それが職員の間に沸き起こり、常に前を向いていく雰囲気生まれれば、松本大学の未来は図らずも明るい。

学士力向上に向けて

今さら言うまでもないが、日本の大学は全入時代を迎えている。それと同時に、大学自体の質の向上が求められる

ようになった。高等教育機関のレベルアップは、日本の教育力そのもののアップにつながるというても過言ではない。松本大学もこうした学生の質を上げるため教職員が日々頭を悩ませている。近年、「学士力」を向上するため、初年次教育等の導入を検討している大学が多くみられるようになった。他大学の動向を知る研修会には教務課の職員も積極的に参加し、情報を教員と共有している。本学でも導入が実現すれば、大学独自のカリキュラムや仕組みを構築する上で、教員と学生をつなぐコーディネーター的な役割りが、職員に求められていくことだろう。

まとめ

今回せっかく「地域に開かれた地方の大学職員の仕事」について紹介してほしいとの依頼を受けたが、随分その主旨から逸れてしまった。むしろ松本大学が、もがいている姿を露呈しただけに止まってしまったかもしれない。もっと画期的な取り組みを知りたいと期待されていた方がいらっしやれば申し訳けないのだが、これが松本大学の職員の現状である。

住吉学長代行が述べている「職員のルーチンワークとし

て定着している業務以外の活動は、研究に似ている」は、職員員の活動にも、受身でない創造性の領域が求められていることを意味している。学生のために自ら問題意識を掲げ、教員とともに新しい価値を創る力。そうした職員力が今改めて問われている。そして、こうした改革意識のある学風とそれを支援する大学組織としての仕組みが両輪となれば、松本大学はこれからの新しい地方大学のあるべき姿として存在意義を示すことであろう。

《参考文献》

- 1、住吉広行「幸せづくり」「地域の必需品」大学への挑戦 大学と教育 第四十六号 二〇〇七年九月
- 2、木村晴壽「若者の地元定着につなげる地域活動の支援——地域まるごとキャンパス『地域づくり考房「ゆめ』の実践 文部科学省 新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム事例集 二〇〇八年十二月
- 3、住吉広行「多チャンネルを通して培う地域社会との連携——地域社会で存在感のある大学を目指して——文部科学省 特色ある大学教育支援プログラム事例集 二〇〇四年二月
- 4、地域社会人向けホスピタリティ人材育成及びスキルア

- 5、ツプのための支援プログラム 松本大学 二〇〇八年三月
- 6、松本大学アニュアルレポート 松本大学 二〇〇八年六月
- 7、平成十九年松本大学松商短期大学部 自己点検・評価報告書 二〇〇八年九月
- 8、住吉広行「元気なキャンパスをつくり出す仕掛けの創出——治療から予防へのパラダイム転換——文部科学省 新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム事例集 二〇〇八年十二月